

「Field research in China 2014/2015 参加報告書」

京都大学経済学研究科 2年 古田 学

今回の調査実習では、人民大学をホストとして、北京において調査を行った。この調査にて、急速に発展する中国経済の実態を肌で感じる事ができた。私の調査地域はインドであるのだが、その首都デリーと比較すると明らかに発展の度合いが異なることを感じた。都市整備や、大学教育水準の違いに特にその違いを感じた。ただし、急速に発展したからこそ、ハード面よりもソフト面ではまだ障壁があるように感じる。例えば、クレジットカードの普及や英語の浸透などにはまだまだ改善の余地があると思われる。

到着日の3月15日は、履修メンバーで夕食をとり進行を深めた。翌日は、人民大学で午前中は講義を受け、午後からはワークショップを行った。まず、午前の講義では、人民大学のTao先生に講義をしていただいたが、いささかその内容は驚きの多いものであった。というのも、先生の中国経済発展に関する悲観的な主張は、多くの中国人研究者の楽観的な主張とは大きく異なっていたからである。具体的には、地方自治体の税収不均衡を是正するためにとっている行動が、2008年金融危機以後の輸出低下と相まって、バブル経済を生み出しており、この先、その行動を是正することはできず、中国経済は危機に瀕するであろうというものである。彼の主張は、筋が通っており、納得できる部分が多かった。午後のワークショップでは、京大側から2名、人民大から2名の報告があった。一番驚いたことは、分析手法は稚拙であったが、学部の2年生が英語で論文を書き、プレゼンテーションを行っていたことである。このあたりに、中国の早熟教育の一端を見た気がした。

17日は、午前中にEnergy conservation centerというエネルギー政策を施行する政府機関を訪問し、午後は中城信国際という半民間の格付け会社を訪問した。前者の機関では、電力や石炭の消費量を節約し、環境汚染を低下させるために実行していることやその成果の報告を受けた。やはり、政府機関であるので、その対応は役人的ではあったが、色々と有用な情報を得られた。後者の格付け会社では、日本とは異なり、地方自治体の公債や社債、保険、証券の中国独自の格付けのプロセスなどについて勉強することができた。

18日は、空き日であったので万里の長城と天安門を訪れた。どちらもスケールが桁違いであり、中国という大国の文化、権力を目の当たりにできた。翌19日は、午前中に研削機を作っている小企業を訪れた。規模を拡大するために、訪れた場所は現在操業しているが、今後は場所を移し、倉庫として活用するようである。そのため、かなり工作機が密集しており、生産性の高さは感じなかったが、R&D部門があり試作品を科学的に作成しているようである。そして、20日のフライトで帰国した。

同行した学生メンバーは、日本人は私を含め2名のみであったので、異文化コミュニケーションという点においても、大きな交わりができたと感じている。またこのような機会があれば、是非参加したいと考えています。